

書評 新刊 紹介



淡水藻類写真集 第20巻
山岸高旺・秋山 優編 内田老鶴圃刊
100 ページ
定価 7,000 円+税 1998

淡水藻類写真集の第20巻が出た。第1巻の刊行が1984年であるので、14年の歳月をかけて20巻が完結したことになる。1ページ(図版)に1種収録され、1巻が100図版より成り、20巻で合計2,000図版、2,000種の淡水藻の顕微鏡写真図を掲載した写真集の刊行である。

この写真集1~20巻は淡水藻類の種の同定を主な目的として作られた本で、1ページ一杯の図版には、まず藻類1種の全体像の顕微鏡写真と分類上の特徴となる部分の拡大写真が示され、次いで必要に応じて電子顕微鏡写真や線画が添えられる。図の説明は英文で、種の記述は和文と英文でされている。収録された淡水藻類2,000種は293属に及び、分類群ごとの内訳は次のようである。藍藻綱41属74種、紅藻綱11属78種、黄色鞭毛藻綱(黄金色藻綱)15属75種、黄緑藻綱15属48種、渦鞭毛藻綱7属18種、緑虫藻綱12属320種、緑藻綱ジグネマ目(ホシミドロ目)41属974種、ジグネマ目以外150属410種、車軸藻綱1属3種。この数字は先に同じ出版社から出た日本淡水藻図鑑(1977)の197属2,308種に近く、わが国の湖沼、河川、池、水田等に普通に見られる淡水藻のほとんどを網羅している。淡水藻類の同定は車軸藻類やマリモ、カワノリなどを除くと、顕微鏡で観察して行うものがほとんどであり、写真は顕微鏡下に見えたそのままを写し出すので藻類の実態をとらえるのに効果的である。利用者はこの写真集1~20巻により、これまで以上にはかどった、そして、より確信のもてる淡水藻の同定が可能と思う。私はこの分野の初心者の方々と淡水藻の同定にこの写真集シリーズを使っているが、上述の日本淡水藻図鑑(1977)と併用することで一層の効果を挙げている。

2,000種にも上る多くの淡水藻類の顕微鏡写真を収録した同定用の本の出版は世界でも例を見ない。吉田忠生博士の新日本海藻誌の刊行と前後して山岸・秋山両博士による淡水藻類写真集全20巻の完結刊行を見た

1998年は日本藻学界にとって記念すべき年となった。編集に当たられた山岸、秋山両博士の努力を多とするとともに、採算を度外視して刊行に踏み切られたという出版社内田老鶴圃に敬意を表したい。

最近、藻類の多様性が認識され、進化・系統の観点から藻類に注目する生物学者が増えてきた。また地球環境温暖化対策、汚水処理対策等の環境問題、あるいは有用物質や生理活性物質の探索等との関連から藻類を研究しようとする人達も増えている。藻類研究の専門家だけでなく、広く藻類に興味をもち野外で実際に採集して藻類を同定し、研究したい人々にはぜひ座右に置きたい写真集である。ちなみに、既に刊行の本シリーズの各巻の価格は、1・2巻 各4,000円+税、3~10巻 各5,000円+税、11~19巻 各7,000円+税である。

なお、珪藻類はこの写真集に含まれていない。珪藻類の同定用の本は近く同じ出版社から刊行予定のことである。

千原光雄(千葉県立中央博物館)



淡水藻類写真集ガイドブックの表紙